

本文書は、下記、男女別学教育シンポジウムのパネルディスカッションの部を文章化したものです。参加することのできなかつた方など、皆様のお役に立てば幸いに存じます。

第1回 男女別学教育シンポジウム

テーマ 男女別学が日本を拓く

日時

2010年8月10日(火) 午後1時開場 1時30分開会 4時30分閉会

会場

アルカディア市ヶ谷(私学会館) 6F「阿蘇」の間 (東京都千代田区九段北4丁目2番25号)

プログラム

1時30分 開会のご挨拶

清水哲雄(鷗友学園女子中学高等学校前校長)

1時35分 基調講演 「なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか」

中井俊己(日本男女別学教育委員会代表)

2時25分 シンポジウム(パネルディスカッション)

伊奈 博(桐光学園中学校高等学校校長)

西村弘子(田園調布学園中等部・高等部校長)

西川邦子(鷗友学園女子中学高等学校長)

松下秀房(京華中学高等学校前校長)

水谷 弘(海城中学校高等学校校長)

コーディネーター 實吉幹夫(東京女子学園中学校高等学校校長)

質疑応答

4時15分 閉会のご挨拶

清水哲雄

2010年8月10日 男女別学教育シンポジウム パネルディスカッションの部

<以下の文章は、テープから起こし若干校正を加えたものです>

司会 辰巳先生

パネリストの先生方のご紹介を含め、私が勤務いたしております東京女子学園の理事長校長であり、本日のコーディネーター役を務めます實吉幹夫にバトンタッチさせていただきます。先生、それでは以降の進行をどうぞよろしく願いいたします。

實吉先生

改めまして、こんにちは。今日は本当に大勢の方にお集まりいただきまして感謝申し上げます。今、司会から紹介がありましたように東京女子学園中学高等学校で理事長校長を務めております實吉でございます。以後コーディネーターとして、私の話はどこに飛ぶか分かりませんので、ご期待も含めてお付き合いをいただきたいと思います。

それでは、私の方からパネラーのご紹介をさせていただきます。私の隣でございますが、川崎市麻生区にあります桐光学園中学校・高等学校の校長をおつとめの伊奈博先生です。

世田谷区経堂にあります鷗友学園女子中学高等学校の、今年から校長に就任された西川邦子先生です。

世田谷区田園調布にあります田園調布学園中学高等学校校長の西村弘子先生です。ちなみにご主人は理事長でいらっしゃいます。

文京区白山にあります京華中学高等学校の元校長の松下秀房先生です。

新宿区大久保にあります海城中学校高等学校の校長の水谷弘先生です。

以上5名の先生方に、これから先生方のご経験を含めてお話をうかがい、後半ではそれぞれ各校のお話をさせていただき、またその後、会場の先生方からのご質問あるいはご意見をいただくという手順を進めてまいりたいと思います。

それではただ今から、先生方のお話をうかがってまいります。

まず一番バッターなのですが、京華中学高等学校の元校長の松下先生にお願いをしたいと思います。女子教育という言葉はいろいろと見聞きするのですが、男子教育という言葉がなかなかありません。そんなことで、松下先生には、男子校としての教育の内容、また新宿で男子校だけの相談会を何年前から立ち上げられた、そんなことも含めて少しお話をさせていただきます。それから中井先生のお話にあったように男子の特性、学びの特性ということも含めて、数学の先生という立場からも少し切り込みをしていただければありがたいです。時間にして8分前後ということでお願いをしておりますので、よろしくお願いいたします。

松下先生

以前、京華中学高等学校の校長をしておりました松下と申します。よろしく願いいたします。今、實吉先生からもありましたように、私どもは2002年頃から新宿の西口のイベント広場で、あのオープンスペースで男子中フェアを開催しているわけですが、その開催に至るまでの話をまずさせていただきます。

2000年ぐらいから男子校の学校の教員関係者が数名集まりまして、昨今女子教育については、女子校の先生方が大変熱心でその効果が世の中に出つつあるけれども、男子校やあるいは男子校教育は語られていないと、ある種の一抔の寂しさを感じながら、酒を飲み交わし、よもやま話をしていたわけです。

考えるところ、明治以来、日本の教育はいわゆる「日本の教育＝男子教育」というように構図はたぶん言われていたのではないかと思います。一方、女子の教育は明治以来、常に話題になっているのです。明治以来の日本の教育史の資料等を探してもよく出てきます。ところが男子教育というのは、まず活字になっていないということで、私どもはその辺から出発しました。

同時に2000年といえますと、少子化が目前に迫ってくるという時代の様相も呈していたわけですから、単純に合同説明会、フェアを開催するだけではなくて、いわゆる男子教育とはどういうものかとか、あるいは21世紀の男子校というのはどうあるべきかとか、そういう観点も踏まえて、男子校が集まってフェアを開催する、と同時に研究会のような集まりにしようじゃないかというのが発端で、2002年に新宿の西口のイベント広場でフェアを開催いたしました。

その時の社会背景というのは、慶応大学の小此木先生等が1980年前後からおっしゃっていましたが、世の中のモラトリアム化というものでした。日本の男子、あるいは大人といっているのでしょうか、元気がないということが社会でいわれておりました。一方では、女性の社会進出が徐々に出始めてきており、たぶんこれから女子が元気になるであろうということが、研究者や社会学者の間でいわれつつあった時です。

そのようなことを反映いたしまして、男子校教育はやはりここで頑張らなくてはいけないということが、常に脳裏にありましたが、実のところ、その共通理念をどのように持っていくかということが一番悩みました。例えば、男子校教育や男子校の意義であるとか、いわゆる従来の男子校とか男子教育のイメージを払拭して、今日的な男子校教育をどのように、もちろん各学校ではそれぞれ立派な教育理念に基づいて実践しているのですが、数ある男子校としての、その全体としてのイメージがどのように世の中に映っているのかということを考え直さなくてはならないわけで、今日的な男子校らしさをどのように考えるかということ、それと同時に21世紀はもう目の前ですから、その時の男子校というのがどうなっているのかを教育理念のもとに考え始めようというのが1つでした。

当時の保護者や生徒が、男子校や男らしさ、男子校の教育をどのように考えているかということ、リサーチする必要があるだろうということで、共通アンケートを実施しよう

と考えました。ついては、我々は1万人アンケートと称していましたが、当時の男子校の保護者と在校生両方で1万人規模のアンケートを実施しそれを分析しました。その一部が今日の中井先生からもご紹介されましたが、全体像を把握して、それを今後どのように我々の共通意識として活かしていくか、これからの議論に入れていくかということを考えました。

分析してみると保護者は、当然かもしれませんが男子校の意義を、古い男子校のイメージ、つまりバンカラであるとか、汚いとか粗野だとか荒っぽいとか、上下関係が厳しいとか、そういったマイナスイメージを持っていることがわかってきました。戦後65年くらい経っていますから、今の中学生や高校生の親はちょうど戦後の二代目になっていて、かつほとんどが共学の学校を出た親なのです。ですからこのままでは、古い男子校のイメージが払拭されていないということで、そのイメージの払拭と同時に新しい今の男子校の様子をとにかくそれぞれ訴えていこう、フェアでも訴えよう、あるいは各学校で努力して説明会等とてにかく訴えていくということを共通の認識として持ち、やっております。

ただし、色々な壁がありまして、特に活字にするとということが大変難しいという壁に当たりました。そんな中で中井先生のあの本を読んで、見事に活字にしてくれたものだと大変嬉しく思っております。これは私ども男子中高関係者の、たぶん共通した思いであろうと思いますが、それをもっともっとこれからは教育の中に活かしていかなければいけないと思っております。

男子校教育の良さというのは具体的にいろいろありますが、私の専門は数学ですので、数学の話をしていきます。中井先生のお話にもありましたが、男の子は空間認知が女の子に比べて優れているという分析があります。数学教育の中で、きちんとした統計をとって、このような分析をしている論文はまだ見たことがないのですが、日頃現場にいて私が感じていることでは、やはり図形的なことに男の子は興味を持つとか、創造性を求める分野、例えば素数や微積分の分野、そういうものにはそれまで興味を示さなかった男の子がいきなりこちらを振り向くというケースをずいぶん経験しました。

例えば、複素数の「ルートマイナス1」の話。これは現実にはない数なのですが、それまで数学というのは積み重ね教科だから前のことが分からないと次のことはわからないよと言っていますが、この分野になると、そういうことはほとんどないように感じます。いきなり出て来てもその都度さっと構築でき、目をキラキラさせながら男の子はやっていきます。また、空間認知能力についてですが、女子と比べてどうかということは、はっきりは言えませんが、かなりの男の子は興味をひくということ、教員生活35年の経験としては言えると思います。

また男の子は、グループや仲間生活して勉強し、そこで競うということを大変好みます。例えば勉強合宿に行ったりすると、異性の目を気にしないでやるという純粋な勉強というものに大変興味を持っているように見えます。手ごたえもずいぶん感じました。そう

いう話をこれからまたちょっとしていきます。これで一旦私の話は終わります。

實吉先生

ありがとうございます。次に学習指導要録の改訂に伴って、男子の学校での家庭科教育というのが随分大幅に変わることになりました。その時にいろいろと男子校からもご相談があったかと思いますが、そんなことも視点に入れながら西村先生に女子の学習のことでお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

西村先生

田園調布学園中等部・高等部の西村でございます。私は今、学校で礼法という授業を担当しておりますけれども、實吉先生からお話がありました、男子も家庭科を学ぶという時、これは1994年の改訂なのですが、この時には家庭科を教えておりました。指導要領の作成などにかかわったのですが、その当時から学び始めた男子がいま自分の家庭を作り始める年頃になっているということです。これは男女のあらゆる差別の撤廃条約ということに係わりまして、高等学校で女子だけしか学んでいない教科があるなどというのは困ったことだということで、男子も家庭科を、ということなのです。

いま当時のことを思い出しますと、家庭科の男女共修というものではなく、男女必修化なのだということ、男女必修修とっておりましたが、共修ではないんですよ、必修修なんですよということを、今さらのようにこれは大事な視点であったと感じるところです。

形の上では、家庭科に関する科目、4単位の科目が3つ設けられましたが、その中の1つは2単位ずつ分割してよい、少なくとも2単位履修すればよいという形だったものですから、内容はともかく形の上では、女子校はそれまでの教育課程表通りで進められる、共学校は女子の家庭科の時間に男子が持ってくればよいタイプの時間を減らすわけですね。そして男子校は、積極的に生活の自立のためだというような視点で家庭科を取り入れる学校と、まあしょうがないからその2単位だけでも入れようかという学校と両方あったかと思いますが、教育課程表の上では内容はともかくとして、どちらかといえばお茶を濁すような形で取り入れたというような男子校もあったと思います。

そして、それぞれの学校が実施していく際に、特に女子校は、内容は変わりましたが従前通りの指導の視点で進めることができた。また、共学校で生活の自立という点では男女とも何も違いはないわけですから、男子にとっては例えば衣食住、家族や保育や消費者の問題を教科として学ぶということが大変新鮮に響き、興味関心をかきたてられる、そしてちょっとゆったりとした気分が味わえるというのでしょうか、男子の興味関心というのはデータの上でもかなり高かったということを記憶しております。

共学校におきましては、例えば男女が同じ場にいることで、それぞれの考え方を知ることができるというのはいいことなんだ、という報告もありましたが、でもちょっと待つて

くださいという意識が私どもの仲間にはございました。

例えば家庭生活観、教育観、結婚観ということにつきましても、高校生の時、生活実感は伴わないわけですね。また憧れや夢の状況であるわけですが、その時にそれぞれの考えを披歴しあう、戦わせるといようなことにどれほどの意味を見出そうかというようなこととございます。そういうこともお互いを知るといことでは大事かもしれませんが、そして社会が男女のパートナーシップにおいて成り立っているという意識は非常に大事なことではあるけれども、生きる時の根っこを育てる中高の6年間、その後半の高等学校の段階では、それぞれの特性、女性としての考え方、保育にしても母性の指導と父性とはまた違ってくるといことがありますよね。その部分を徹底することの方に価値があるのではないか。それぞれの能力といいましょうか、意識といいましょうか、その部分をもっと掘り下げたいのだといような、何かジレンマといいましょうか、そういった思いを抱いていたわけとございます。

そして2単位でいいといようなことも、この時からじわりじわりとあったものですから、その次の改訂の2003年度の改訂の段階で、学校週5日制等の問題もありましたので、2単位科目といものが作られ、女子の家庭科としては、どうも縮小してしまっただとい印象です。男子が学ぶことになったために男子にとっては興味関心を惹かれたかかもしれませんが、ひょっとしたら女子にとっては迷惑なことであったかも知れない。そう考えてくると、それぞれの学校のカリキュラムは独自性を発揮すべきものとございますので、そこでどれほどの縛りが必要なのだろうかといことを1つの問題意識として持つところとございます。

男子校で家庭科をどうしているかとい時に、例えば海城高校さんでもハンバーグを作っていますといような端的な例ですよね。それは男子も非常に興味関心をもつはずとございます。男子のとらえ方、自分のためにどんな風に作って、ボリュームを重視するか、もちろん味も重視しますが、そういう視点があります。女子だとこれを、例えばおじいちゃんのためにはどう工夫したらいいかな、子どものためだったらどうしようかな、パーティーに使うにはどうしようかなといような視点があるわけです。男子は、自立のためにこのハンバーグと何を組み合わせたらいいんだといところまでは指導がいきますが、女子の場合に、人の喜ぶ顔、感情の発露の仕方とか、何を始点に脳が働くかとい話がありました。喜ぶ顔を思い描いての指導といことで、例えばその教育を通して鍛え導く父性の指導と、慈しみ育む母性の指導といことに繋げていくべきだといことを考えますと、今さらのように男女共修ではなく男女必修なのだとい点が大事な視点だと思っております。

松下先生の時間厳守でプレッシャーがかかりまして、前半の話は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

實吉先生

普段、学習というと英数国理社のことが話題になるところ、いま家庭科という切り口でお話をいただきましたが、この会場でも新鮮な聞き方をされた方がたぶん多いのではないかなと期待をしています。

清水先生の話の中にありましたが、私も頭にきているのですが、もはや女子教育の時代は終わったと言って、自分の学校が共学化するにあたって大々的にそういう物言いをされた方がおります。それはそうとして、以前から学校としては、男女共学の社会を作っているながら、学びの世界では男女別学という形にして取り組んでこられた桐光学園の伊奈先生にその辺を含めてお話しただきたいと思います。中村俊輔がどう育ったかはまた別の機会にして、そんな視点でお願いしたいと思います。

伊奈先生

改めまして、桐光学園中学高等学校の校長の伊奈と申します。よろしくお願いいたします。

私以外は全部東京の学校、私だけ神奈川の学校です。また、今お話にありましたように分類でいいますと男子校でも女子校でもありませんで、共学校である桐光学園がなぜここにいるのだろうかと思われる方もいらっしゃるかと思います。本校は神奈川県川崎市の北部、小田急線の新百合ヶ丘に程近い所にある学校ですが、今お話いただきましたように男子・女子別学、男子棟・女子棟それぞれ別の棟で授業やホームルームを行っておりまして、共用の部分といえますか、放課後のクラブ活動や学校行事、その他については一緒に活動をしております。学校組織といたしましては、いま中学生は男子6クラス、女子が4クラスありますので、それぞれに担任・副担任を置きまして学年10人のスタッフが男子・女子分かれずに男子クラスも女子クラスも教えています。

私もずっと教員をやっておりまして男子のクラスでの授業、女子のクラスでの授業を展開してまいりました。そして学校説明会などで、何故うちは男子・女子別学なのか、何故学習・ホームルームについて別学なのかについてずっと説明させていただきました。その中で男子と女子の明らかな違いといえますか、授業を展開する上で、男子のクラスで授業と同じやり方で女子のクラスをやろうとすると、まったくうまくいかない。やはり女子は女子向けの授業展開が必要で、男子は男子向けの授業展開が必要だということを身をもって体験しております。その中でそれぞれに適した授業を行うことがどれほど効果的であるのかなど、男子・女子別学の説明を学校説明会で力説してまいった訳です。そういう経緯で、たぶん今日ここに参加するようお話をいただいたのだろうと考えております。

中井先生の先程のお話、それから著書も拝読させていただきまして本当にその通りだということを実感いたします。最初に、女子は言語能力が高く、男子は空間認知能力が高いというお話がありましたが、私もそう思います。

本校入試は男子も女子も同じ問題を出題します。ボーダーラインは人数を別々に設定していますので別々に出るのですが、男子の方は若干高めに出ます。ボーダーラインは1割ほど男子の方が高いのですが、それでも女子集団の国語平均点は男子に比べて常に10点くらい高い。単純に女子の方が国語平均点は高いというのは想像いただけと思うのですが、枝問分析、各問題別の正答率を男女別に出してみますと、これも顕著な違いが出てまいりまして、文法項目等については男子が女子よりも高い正答率を示しますが男子が圧倒的に低くなる問題があります。それはいわゆる文章題の中の主人公の心情を問う問題、です。これは男子・女子、特に小学校6年生から中学校に入ろうとする頃の生徒の言語能力の差と言っていいのか、あるいは精神年齢の差と言った方が適切かもしれませんが、そういった違いが出てまいります。ですからそれぞれに適した授業展開をするというのが、男子校・女子校の本当に大きな魅力なのだということを、お話ししてまいった次第でございます。

先ほど男子の空間認知能力のお話がありましたけれど、私は物理の授業をやっていまして、一般的に共学校の高校1年生で物理導入をすると、女の子がどうしても物理が苦手になる。私どものように両方でやっていると、その原因が本当にわかるような気がいたします。それは何かと言いますと、例えば、力学では最初ベクトルが出てまいりますが、力学の中で力を二つに分ける、または一つの物体に二つの力が働いた時の合力が平行四辺形の対角線上に出るといったことがあります。このことに関して男の子は直感的に解ります。これは体験を通して、どんな生徒でも、ずっとという語弊がありますが多くの生徒が何の抵抗もなく入っていきますけれど、女子についてはその感覚を理解するまでに時間がかかります。ですから女子のクラスではこういう部分は、むしろベクトルの分野をきちっと数学的に理解させ、基礎的な項目を積み重ねることによって問題は確実にクリアさせる。ですからたぶん女子校の先生方は、それをやられているのだと思います。女子校においてはこのように理科教育についても注意深く指導していますから理系進学者がほぼ半数になってくるのだろうと思います。これを一緒にやっていると、想像するに、例えば板書しながら斜面上に物体を置いて斜面方向と斜面の垂直方向と力を分解しましょうという話をする、その時に男子はぱっと答えるが女子はそうはいかないのではないかと思う。その時にもし女子だけのクラスであれば女子全体に理解が不十分であるということで、そこの部分に十分に時間をかけることができる、これによって男子と同じように女子も着実に力がつくのではないかなと思います。これは国語においても英語の授業展開においても同様で、さまざまな形で男子と女子の違いというものが出てきます。本校においては、入試問題も含めて実力試験は共通の問題をやっておりまして、その中で分析を行うと、男子と女子の理解の仕方の違いというものが本当に明確になってまいります。今日の中井先生のお話と連動して、具体的にまたこんなこともありますということをお話しできればと考えております。以上よろしく願いいたします。

實吉先生

皆さん、本当に気を遣っていただいて時間を有効に使っていただいておりますが、続きまして西川先生。西川先生にはレナード・サックスが書いた『男の子の脳・女の子の脳』という本を読まれて、こんなことだよという風に全体をまとめたお話をお願いしたいのですが、そこで共感できた部分も含めて、9分取って大丈夫ですから、よろしく願いいたします。

西川先生

改めまして、鷗友学園女子中学高等学校の校長をしております西川と申します。よろしく願いいたします。レナード・サックスの本をご紹介しますのですが、その前に自分のことでお恥ずかしいこともあります。お話したいことがあります。私は父が銀行に勤めておりまして、国内の、主に西日本ですけれども大きな都市を転動していた関係で、もしかしたら転校の回数が、ここにいらっしゃる方の誰にも負けないくらい多かったと思います。高校は3つ行きました。その3つめの学校が私立の女子校だったものですから、その前の2つの公立の高校と私立女子校との違いというものを自分の体験として非常に強く印象を持っているので、そのお話をさせていただきたいと思います。

最初と次の高校は両方とも公立だったのですが、男の子の数が女の子の数の4倍くらいだったのです。最初の高校は男子だけのクラスと女子と男子が半分ずつのクラスというものがありました。2つめの高校は男子が1クラスに40人、女子が10人というクラスでした。今から振り返ってみますと、どちらも私自身その時は意識しませんでした。自分をあまり出せなかったように思います。

少し語弊があるといけないのですが、人気のある女の子はとにかく可愛い子でした、容姿のすばらしい人ですね。実はこのレナード・サックスさんの本にも触れられていますけれど、共学の場合自信が持てる女の子というのは、やはり自分の容姿に自信がある子ということだったのです。若干思い当たるところがあります。私はもちろん、そうではない方でしたけれど、最後に私立の女子校に転校してきた時に、何てこんなに居心地の良い所があるものだと思ってしまったのです。公立の時には話したこともない男の子がクラスにもまだいましたし、でも女子校に来ましたら、当時は1クラスに50人以上おりましたけれど、あっという間にみんなと仲良くなることができました。運動会も、鷗友学園はとても盛り上がりますけれども、それ以上といっても良いくらい盛り上がる学校でした。学習面でも、いわゆる本格的な学問に触れさせてくれたのは、この私立の女子校に入ってからです。

たくさん言いたいことはありますが、さきほど物理の話が出ましたので物理の話をしたいと思います。実は私は物理が大好きで、実はちゃんとは解っていなかったと思うのですが、なぜか物理が大好きだったのです。その時の教え方というのが、やはりあったと思

うのですけれど、文系の中でたったひとり物理を選択して、それが全然誰にも咎められはしないし、違和感もなく文系のクラスの中で選択することができ、本当は何も解っていなかったと思うのですけれど、先生が相対性理論の話をしてくださると一瞬解ったような気になる。その時のすばらしい気持ちというのは今でも忘れることができません。もし共学にそのままいたら、女の子がひとりだけ物理を取るということは多分なかったのではないかと、自然に文系の科目に流れていたのではないかなと思います。

それから、この私立高校で学んだおかげで私は今までの自分ではできなかったこと、つまり自分の考えていることを自然に出せるといいますか、表出するということができるようになったと思います。そして出した時に反応が返ってくる、友達がどう言ってくれるとか先生がいろいろコメントしてくれるとか、そういう事がどんなに楽しいことか、この女子校に来て感じることができました。

振り返りますと男子と一緒に学んだことをもっと生かせばよかったのですが、やはり、どう思われるんだろうとか、どう評価されるんだろうとかということが先に立ってしまって…。この私立の女子校に入ってから、友達も教員の皆さんも自然に声をかけてくださったということが初めてでした。こういうこともありまして、私は実感として別学の良さというものを味わったということをお話したいと思います。

さて、そのレナード・サックスさんの本ですけれども、私はこの機会をいただきまして3回目読みました。それでなんと申しましょうか、やはり私どもが毎日いろいろ感じていることをずいぶんここで表されている、中井先生の本もそうですけれども共通する部分があるように思いました。

脳の生理学的なことは詳しいことは解りませんが、男の子と女の子とでは脳のいろいろな部分がどのように発達するか、時間であるとか速度であるとかがまったく違うのだということから、学び方も、遊び方も、喧嘩の仕方も、世界の見え方も、音の聞こえ方も、そしてリスクの取り方も、まったく違うというように書かれています。この中の印象的な言葉といたしましては「女の子の学習された無力」という言葉があります。つまり無力を学習するというのも変な話ですけれども、小さな頃からリスクを取らないように、なるだけ安全に、という風にやはり親が思ってしまうのは、今も共通かと思います。それから「その結果がんばって挑戦しようという気持ちが、なかなか育ちにくい、大きなトレーニングが必要な存在」と書かれています。このことも私は実感しておりまして、鷗友学園はとても元気の良い子どもがいっぱいいるのですけれど、大学受験になるとやはりたじろいでしまう、安全志向になってしまうというのが現状でございます。

それから学び方の面でも、教師との関係、友達との関係、男の子と女の子ではかなり違うことがあることは皆さんも感じていらっしゃると思います。その結果、男の子と女の子の特性を問わない教育が行われているせいで、男の子も女の子も両方が不利な立場に置かれてしまっている。これは大変残念なことだということですね。そして学びの面では、自

分の学力を評価する時、男の子は何と言いますか根拠のない自信というのでしょうか、そういうものを持ち、それはとても良いように働くこともあるのですけれども、それに対して女の子は、必要以上に批判的に自分の学力を捉えがちであるという風に書かれています。私は女子校に勤めておりますので、女の子の場合は励まし自信をつけてやる必要があると感じます。男の子の場合は折に触れて現実を認識させてあげることが必要である、そして更に上に向けて挑戦させるということですね。

教育の大きな使命はすべての子どもがその潜在能力を發揮できるようにすることだと思いますが、現状はそれぞれの男の子らしさ女の子らしさに固定化してしまうことによって、それぞれが十分に伸ばし切れていないというものだ、と彼は言っています。最後の方になるのですが、このフレーズが私には非常に印象的だったので紹介します。「同じ音符を大声で歌いながら、同時に小声で歌うことはできない」。本当にそうだと思うのですね。ですから、どちらかの性に合わせようとすれば、もう一方の性が犠牲になる場合がある、ということですね。そして彼は、こういう風に断じています。「共学校にはジェンダーの固定観念を強化する傾向があり、男女別の学校にはジェンダーの固定観念を打ち破る傾向がある」ということで、彼はそれぞれの良さを發揮するために、まず男女の発達の違いを認識すること、そして男女別々に教育やスポーツを行う機会を活用することを提唱しているわけです。以上、ご報告を終わります。

實吉先生

解説を見事にさせていただいて、ありがとうございました。それでは続きまして水谷先生にお話を伺いたと思います。水谷先生は都立の学校にお勤めになり、最後は都立の高校長もされて全国のお世話もしていただいた先生です。そのあと麹町学園という女子校の校長にご就任になり、現在は男子校で海城中学高校の校長、私などと比べて多くの経験をお持ちなので、そのあたりも含めて男子の特性、女子の特性に触れていただきながらお話をいただければと思います。よろしく願いいたします。

水谷先生

海城中学高等学校の水谷です、どうぞよろしくお願いいたします。海城にまいりまして今年は3年目でございますけれども、特に男子にとって別学教育が必要である、何故か。その理由は後で述べたいと思いますが、このままいったら国が滅ぶのではないか。そういう私自身の個人的な危機意識を持っています。

平成14年に、埼玉県が県の男女共同参画苦情処理委員から勧告書いただいたのですが、その内容は、いわゆる160校あるうちの16校が男女別学の形になっている、それを共学にしろという訴えだったと思います。それに対して公立中学校の校長先生方の80%が共学には反対である、別学で良いのだという回答があって、埼玉県の教育委員会は現在の形に納

めているという、そのような報告書が平成14年3月28日の勧告書に対して出されている。

東京都の場合は残念ながら美濃部都政のところで、16年間でしたか、かつての旧制の一中、二中と言われる所も含めて女子を徐々に増やしていく形を取っていると思います。例えば、戸山高校の場合は昭和30年代の真ん中頃だったと思いますが1学年400名に対して、女子が90名前後でしたが、現在はほぼ同数になっていると思います。そういうところで私自身が36年間、都立高校におりました経験を、少し時代を追いながらいくつか分けてみたのです。経験則からでございますので、例えば生徒会長とか学級委員長などのイニシアチブを取れるいわゆる上層部の生徒は、徐々に私学に流れていきますから一致しない部分があるかもしれませんが、昭和50年頃までは男子が中心だったのですね。そして、それから10年ぐらい経った頃は男子を助けて副会長とか副委員長は女子が中心になって動いている。ですから男子は飾りであった、という言い方をすれば叱られますけれど、それに近いような記憶があります。その後は女子が会長をやり、各クラスの委員長を女子が堂々とやる、男子が陰になっていくという、そういう構図がひとつあったような気がいたします。それともうひとつ、よく話の材料として出てきたのは、男子の成長は女子に比べたら高校の入学時つまり高校1年はかなりの差があります。

ちょっと話を逸らしますけれども、8月6日でしたけれど広島での第65回原爆の日で、小学校6年生の誓いの言葉、テレビで見た方もいらっしゃると思いますが、男の子の方が頭一つ分女の子より小さいんですね。そして、男の子の誓いの言葉が、ものすごくかん高かった。女子の方は、どっしりしていた。別に差別とか区別とかいう意味ではなくて、ご理解いただきたいのですけれども、それを見た時になかなか大変な時代が来ているな、まあ前からそうだったと思いますが、そういう中で、昭和40年に私は都立高校の教員になりましたから、その頃だと高校2年生の1学期頃に、男の子が女の子に精神的な面も含めて追いついていた、それが50年を過ぎる頃から、高校2年生の終わり頃にならないと追いつかない。半年近く、4ヶ月ぐらい遅れてきている。60年を超えた時には高3の2学期にやっと追いつく。そして平成になってからは非常に厳しい、そういう状況が出てくる。

ただ、いわゆる上位層が私学に抜けているということを入念に入れなければなりませんけれども、そういう状況が出てきていることだけは事実です。そういう中で、共学にどれだけの意味があるのか。例えば、私は都立青山に昭和46年から昭和63年までおりましたが、まず入学してくる子どもたちの学力レベルでは、私は数学の教員で先程の話をその通りだと思って聞いておりましたが、数学と理科は男子の方がいわゆる合格するときの点はずっと高いです。国語と英語については、男子の方が女子よりも低いです。社会科はとんとんぐらい。それで入学してきた子どもたちに対して、私の今の反省なのですけれども、数学の教員として正直言って女子は完全に無視しました。何故か。そうでない限りは結果が出せない、意欲のある男子をうまく伸ばすことができない。レベル的には、入ってきた時の500点満点で450点ぐらいですね。9割ぐらいはみんな取っている。女の子もそうです。けれ

ども入ってからそれを伸ばすためには、待ってられない。3年しか時間がないわけですから。それは他の教科においても同様です。ただ国語の場合は、そうでもなかった。そういう状況の中で私自身は経験してまいりましたし、今もその延長上に少なくとも陰の部分があるのではないだろうか。そういう意味で、このままいったら国が減ぶよということを職員会議ではっきりと教員に言います。そうしないためには今、何をしていたら良いのかというと、やっぱり学校を変えていこうよという動きもその中に出てきております。

後で、もう少しいろいろな話をさせていただきますけれど、始めとしてはこういうことで話をさせていただきました。

實吉先生

はい、ありがとうございました。だいたい5人の先生方の切り口的なところはお解りいただいたかと思います。それでは、時間のプレッシャーがあったという西村先生を今度はトップバッターにして、時間を気にしないでいただいて結構ですので、語り尽くせないとか、もう少しこの辺を突っ込んでおきたいとか、あるいは別の視点でお話があれば、お聞かせいただきたいと思います。よろしくお願いします。

西村先生

先程は家庭科の立場からお話をいたしましたけれども、私どもの学園には幼稚園が併設されていて家庭科教育の中で見学というようなことが、これは男子が学ぶ家庭科でも同様ですけれど組み込まれています。その幼稚園の先生たちに「将来、夢や目標を実現できるだろうと思える子の特徴が、幼児期から何かありますか」とお尋ねしますと、「それは集中力です」と言われます。「では、その集中力はどのように表れるのですか」と言いますと、男の子は、これが好きだとなると本当に夢中になる、というのですね。女の子は何時間でもコツコツ続けていることができる、この集中力の表し方、深さと広さとでもいうのでしょうか、そういう違いがありますよ、というようなことを言われて、経験からしても男女は違うなということを感じておりました。

園児が入園したての頃の幼稚園に、生徒がグループなどでふらっと訪ねてみる場合があります。そうしますと、泣きわめく子は男の子で、じっと堪えるのは女の子だと言うのですね。その泣きわめくということについて幼稚園の先生と話をしますと、送ってきた親御さんがお帰りになると、もう初めの1ヶ月間は男の子をどうやって幼稚園に慣れさせるかということに、大変な思いをすることでした。

感情のコントロールの話が先程ありましたけれど、女の子は、今はお母さんがいない時なんだ、自分は今何をするんだというような、聞き分けというのでしょうか、そういうことができる状況がある。女の子がめそめそするわけではなくて男の子が泣いてしまうのだというような違いがあるということも、生徒自身が見聞きしてくることがあります。

私どもの学校では、生徒が自分で選んで、ぜひ女子校に行きたいなという思いで入って来る子が多々ございます。保護者の方、お母さん自身は共学で学んでいる、先程のデータのように共学で学んでいる親御さんは多いけれど、子どもは女子校に行きたいと言う。何故かという、子どもっぽい男の子には幼児的な残虐さがありますね、そういう言葉で傷つけられたくないというようなこともあるようですし、とにかく女の子は、いろいろな面で自信を持ちたい、認められたいという潜在的なものがあるのではないかというようなことを、折々に話します。

男女の違いというものは当たり前のことだから、それぞれの学校がそれを踏まえた、どういうプログラムを用意したらいいのかということに尽きると思うのですが、その時に、例えばキャリアデザインひとつ取っても、ライフステージの影響をもろに受けるのは、男子よりは女子ですね。男子が、結婚を機に仕事をどうしようかなどというようなことは女性ほど考えません。それから子育てで育児休業を男性が取るとニュースになるぐらいの時代ですので、その時に自分がどう判断していこうかというようなことは女子の方がよほど迫られてくるわけですね。そうしますとキャリアデザインひとつ取っても、その指導ひとつ取っても、女子に焦点を当てて、常に多くのものから選択していくとか、とっさに判断するとか、何が何でも優先するものは、この時はこの食事なのだとか子どもの世話なのだとか、自分の身だしなみなのだとか、そういう優先するものをとっさに判断するというような訓練をしていかななくてはならない。どういうプログラムを用意するかにかかっている。男女の特性というのはそれぞれ違うのだ。だとしたらどう焦点を当てるかということで、例えば私どもの学校では、直接体験ということ重視しよう、机上で農業のことを学ぶよりも現地に行ってファームステイをさせようとか、さきほど平和教育の話が出ましたけれど実際に現地に行って発信者から話を聞いてこようとか、そういった直接体験を重視するようなプログラムを作ることを検討しています。これはどの学校でもそうで、それぞれの特性を踏まえていますよという発信になっていくだろうと考えているところでございます。

また、私どもは何とか生徒に様々な可能性というか自信を持たせたいと考えています。生徒を見ていて、認められる経験、安定感がありさえすれば女子の能力はめいっぱい伸びていく。それは男子も同じかもしれませんが、例えばクラブを選ぶとき、好きだから選ぶだけではなくて、苦手だからやってみようとする子をいかに増やしていくか、というようなことですね。私は人前に出るのが苦手だから、演劇部だとかバトン部だとかそういったところで活動してみたいという、その思いをどう吸い上げていくかというようなことです。運動が苦手だから、陸上部に入って頑張ってみようかなというような気持ちをどう吸い上げていくかといいますと、一人ひとりを名前と呼ぶ教育だとか、自己ベストを誉め称える教育だとか、例えばそういったことが必要になってくるのだなということを痛感している次第でございます。

實吉先生

西村先生は学校全体の中では女子を教育され、ご家庭ではご主人を教育されている立場でいらっしゃるのですけれど（笑）

先ほど学習の面で別学というお話をしていただきましたが、行事を含めて男女一緒にとすることも、男女がいることの効果ということも当然あるわけで、伊奈先生、その辺について触れながら、語り足りないことをお話していただけますでしょうか。

伊奈先生

そうですね、先程いわゆる学習の理解という意味での、男女の違いということをお話しさせていただきました。全体的な環境の違いについてですが、私どもは男子と女子と昼間授業をやっている時間帯に、ご来校される保護者の方をご案内します。男子棟をずっと回っていますと、何と言いますか、まるっきり男子校なわけですね。教室の中は、体育で誰もいない机が乱雑になっている、着替えの跡とかですね、いかにも男子校だなと。それから掲示物も画鋏のひとつが取れていたりですね、そういった雰囲気があります。それが女子棟へ行きますと、誰もいない教室も机がきちんとしていますし、掲示物についても何か花の模様であるとか、ちょっとした気遣いがある、いかにも女子校だなという雰囲気になるわけです。

それから、そういった雰囲気の違いもあるのですけれど、歩いていて一番保護者が気づかれるのは、男子棟を歩いている時は授業をやっている教員の声がわんわんと響くんです。それが女子棟へ行くと、教員の声が聞こえない。それは先程ありました女子のクラスにおいては本当に囁くような小さな声で授業ができる。男子においては絶叫という語弊がありますけれど、本当に大きな声で、しかも身振り手振りを交えてやるが必要になってきます。女子のクラスでそれをやると、うまくいかないというか、嫌がられます。要するに熱血授業は、女子は本当に抵抗があります。大きな声、それから身振り手振りの大きい授業に対して抵抗がある。ですから、男子の授業で実によくやっていた先生方が、女子のクラスへ行って授業をやり始めて、なかなかうまくいかないで悩む、ということもございます。それでどうしたのかと聞きますと、その中で、やはりそれに適した形に変えていくわけですね。女子のクラスでやる時には女子に合う授業方法で行う。

これは環境も含めということになります。職員室が2つありまして、男子棟と女子棟に1つずつ、男子クラスの担任・副担任だった場合には男子棟の職員室、女子のクラスになった場合は女子棟の職員室になりますけれども、まあ女子棟に行けば女子のクラスが多くなりますから、そうすると教員の服装が変わります。女子のクラスが多くなると、やはり身だしなみをきちっとするようになる。これは、私はかつて女子校の先生方を拝見させていただいた時に、本当に皆さんきちっとされていて、さすが品ある女子の育成のためには

先生が率先して、きちっとしておられるのだなと思っていたのですが、実はどうもそうではなくて生徒が変えていく、かつて私も男子校でスタートしましたので、その時には、まだまだ身だしなみなんてあまり気にしなくても十分に授業ができた、そういう状態から女子教育を実践することによって身だしなみを整えるようになっていった、これは何かというのですね、それぞれ男子・女子にとっての心地良さ、さきほど居心地の良いというお話がありましたけれども、生徒にとっての居心地の良い空間ができていくということが、この学校にとっては非常に重要なことなのではないかなと思っています。

やはり、何かものを学び、受け入れていくためには、精神的な安定というものが何よりも必要なのだらうと思います。そういった生徒の精神的な安定をはかる上で、それぞれの生徒にとって居心地の良い空間を作りあげていく必要を感じます。別学というのは男子にとっても女子にとっても、その差異を踏まえて空間を作りあげること、その空間の中での学ぶとことに、非常に大きな効果があるのではないかなと思います。

私立学校の場合には、校風に惹かれてそれぞれの生徒さんが、学校を選んでこられますけれど、校風に惹かれるというのは、ひとつは似たもの同士が集まるというところがありますね。女子校は女子校の中でも、その学校の似たもの同士が集まっていく、その似たもの同士の中で、それぞれの個性を發揮していくといえますか個性を磨いていくといえますか、そういう効果が大きいのではないかなと思います。そういう似たもの同士の集団の中で、ひとつは男子・女子の別学制度というのは、生徒にとっても非常に精神的な安定を迎えうる、それからその中で更に個性を發揮しうる環境なのではないかな。このように思っています。

廊下を歩いている時の先生方の声について保護者から指摘がありました。「男子棟の先生は、やはり大きな声を出されるのですね」。まったく先程の中井先生のお話の通りだなと思っています。また、別の機会に事例がありましたらお話をしたいと思います。

實吉先生

ありがとうございました。さっき西川先生の経歴を自分で披露していただいて、実は10日ぐらい前に私ってこんななのよというお話を聞いて、私の長男の嫁の先輩なんだと初めてわかったのですが、鷗友学園では75周年を記念して、女子教育のことについていろいろな方をお呼びして、講演いただくというようなことをしてこられたと思います。その辺で、あえて今日のテーマに沿った話の中で、先生の方でご披露いただけることがあれば、お話いただけるとありがたいのですが。いずれ刊行物として出ると伺っていますので、それを楽しみにしていますけれども、少し早めに情報をいただければと思います。

西川先生

鷗友学園は1935年に創立ということで今年75周年を迎えますが、70周年から75周年

にかけての記念事業として、いろいろと取り組んでまいりました。その中で今ここにも出席しておりますけれど、柴田副理事長が、いわゆる記念事業というのはハード面、建築ですとか、そういうものはよく行われているけれども、女子校として女子教育の見直しをする、もう一度考えてみる機会を持って良いのではないかというアイデアを出されました。それを聞いて皆その通りだと賛同いたしましたので、一昨年、去年と2年連続で女子教育連続講演会というのを実施してまいりました。私はその責任者ではないので、お話をするのはちょっと恥ずかしいのですが、もちろん協力してまいりましたので、少しお話をいたします。

大きな学校行事が終わってからでないとなかなかできませんので、一昨年も昨年もだいたい秋から冬にかけて、その時期に1ヶ月に1人ないし2人の講師の方をお招きして女子教育に関する講演をしていただいたわけです。いま話にありましたように、この内容を初年度のものを一冊1つにまとめまして発送し、2冊目もこの夏休み中に、鋭意努力して製本中でございます。

初年度は足かけ10回の講演があったのですが、最初に講演してくださったのがお茶の水女子大学の名誉教授の天野正子先生で、この方のいろいろなアドバイスといいたいでしょうか、コーディネートをしていただきながら、この10回が可能になったという経緯がございます。

この天野先生がおっしゃったことなのですが、今まで何度もお話が出たこととかなりだぶっている部分がありますが、私どもが学校の理念を語る時にもよく使っている「自尊感情」という言葉ですね、天野先生は英語でセルフ・エスティームとおっしゃっていましたが、自分もまんざらではないとか自分を大切に思う、そういう感覚が、やはりとても思春期には大切である、その人を成長させる基になるということですね。自尊感情というのは誰でもその人の人生の可能性を広げるために、自分の価値を認める権利がある、権利という言葉を使っていっちゃいました。そして挑戦すること、意志決定をすることで、当然うまくいくこともあれば、うまくいなくて傷つくこともあるのですが、その傷でさえ、むしろ傷とか躓きが自分を切り開く、そういう基になるのだというお話がありました。人間の成長は人間性の傷つきやすさと表裏一体である、というお話がありました。本当にその通りだと思いました。

それから思春期とは自分の行動や外観について、他の人がどのように評価をしているかを頼りに、自己を見つめ自分とは何者なのか考える時期とも教えていただいたのですが、チャールズ・ホートン・クーリーさんという人が「鏡に映る自己」とおっしゃったそうです。このことも私ども毎日生徒に接していて、本当にその通りだと思います。

社会を見回しますと、まだまだ参加はしていても社会や職場に参画していないという、女性の現実があります。そういうことを考え女子校としては、いきなり社会の荒海に出て行っても、なかなかそんなことができるわけがないのですから、まず助走段階、力を蓄える段階でリーダーシップをつける。あるいはいろいろな多様性を大切にしながら、企画し

たり運営したりする経験を少しずつ積んでいくことが大切だなと私も思います。男女共学の場合は、とかく女の子が第2の存在となりがちな一面もありますので、第1の存在となれる女子校の意義は大きいと思います。これを裏返せば男子校の意義につながるとは思います。

それで彼女は、これから女子をエンパワー、つまり力をつけていく学校にするために、5つのことをおっしゃっています。1つは教職員が気持ちを揃えること。2つめは自らの学校の建学精神を見据えた教育を日常の教育活動のやはり中心に置くということ。3つめは生徒の自信と可能性を引き出す方向で保護者とのパートナーシップを育てるということ。4つめは同窓会との緊密な絆を育てて鷗友学園なら鷗友学園の、それぞれの学校ならそれぞれの学校の志のつながりとか広がりを作っていくということ。そして最後に、女子校の個性や特徴、あるいはやっていることを社会に積極的に発信していくことを提案なさっています。これは男子校も同じだと思って、ご紹介いたします。こんなところで、よろしいですか？

實吉先生

ありがとうございました。後でまた、いくつかのことを質問していきたいと思います。水谷先生、また今回最後で申し訳ないのですが、トップバッターでした松下先生にそろそろ登場していただかなくてはなりません。

実は今日、会場に聖学院の平方先生がいらっしゃいますが「入ってくる中学1年生が、もう女の子にいじめられたくないと言って、うちの学校に入ってくるんだよな」といつか嘆かれたことがあるのですけれど、もちろんその辺も含めて、小学校時代、中学校時代、高校時代、いろいろあると思いますけれども、少しお話をいただきたい、あと、先生の想いを少し語っていただきたいと想います。よろしくお願ひします。

松下先生

いろいろな先生方のお話、あるいは中井先生のご本を読まれて、皆さん普段からそういうことは考えていたと思っていらっしゃると、今思うのですが、10代の男の子の成長と女の子の成長に違いがあるというのはご指摘の通りで、私は数学の人間ですから、説明会ではこう表現しています。女の子は、小学校6年到達時のポテンシャルが高くて、その後6年間安定的に、だいたい1次関数的に成長していく。ですから直線的で、男の子は、小学校6年到達時はやや低くて、もちろん個性はありますが、6年間が不連続で放物線的だと、つまり2次関数的に成長していくということですね。ですから、ゆっくりいって、ある所でターニングポイントがあります。細かく見れば、どの男の子でもそういう点が結構あるのですけれども、そこから急にぐっと成長していく、そういうような事例を、私も実はいくつも体験しました。例えば6年間でいうと、中学の3年間は本当に目立たず、学習

面でも意欲的でなかった子が高校に入って、高校の学習課程、若干の先取りをやってい
ますので、そういう課程になって、ぐんぐん意欲的になってきて、高校3年間で飛躍的に伸
びたケース。

例えば、小学校6年生の時の模擬試験等の偏差値で、自分よりもいくつもの上の偏差値を
取って共学校の入学した女の子よりも、ずいぶん伸びたという報告を受けております。

それから今3人の先生からありましたように、男の子が男の子だけになると、人間関係
能力の特徴というものがはっきり出るのでですね。学習面での指摘がありましたけれど、私
は人間関係能力の特徴というものも、ずいぶんあるのではないかと思うのですね。私の所
は男子校と女子校と共学の高等学校がある学校なのですが、女子校の先生方からも
いろいろな話を聞いておりますが、例えば男の子は中学1年で入ってくると、幼児教育で
よく言われるような退行現象というものがありますよね、非常に幼い行動をあえて集団で
示す、例えば制服の何でもないことに笑ったり、じゃれあったり、廊下を駆け回っていた
りとか。そういう面で言うと非常に幼いですね。いくなれば時の流れは中学1年だけれど、
顔とか頭とか体全体がまだまだ小学生、そういうことを実感します。それは水谷先生の話
の中にもありましたけれども、私が若い頃、昭和50年代頃よりも平成に入ってからの方が、
そういうことを強く感じますね。ですから、実は男の子と女の子は教科、学習面でも個性
や特徴はあるけれども、私はそれ以上に人間関係能力の発達に差異があるのではないかと
感じております。

そういうことがありますので、私たちが、男の子を男だけの集団にしたり、いろいろな
環境を整えてやると、彼らは競い合うことをすぐに受け入れます。学習面の事であったり
クラブの面であったり、同級生と競い合ったり年齢が違う先輩後輩が競い合ったり、そう
いうことがあって、男子校はスポーツクラブ等の参加率が極めて高いのですね。中学課程
では90%を超える学校がざらにあるのです。

そこで彼らは、先輩とそれこそ裸の付き合いとかざっくばらんな人間関係を構築す
る基を作っていくのですね。そういうことが言えるのではないかと思います。その中で、
年齢差を超えた経験をすることによって、リーダーシップと、もうひとつフォロワーシ
ップというものを身につけるのだと私は思います。世間ではリーダーシップだけが目につき
ますけれども、実はそこで、もうひとつフォロワーシップも重要です。やはりリーダーに
なる人間というのは集団の中で、ある限られた1人が2人であるし、もちろんリーダー的
な役目を果たす集団は将来大人になって大事ですが、と同時にそれを支えるフォロワーシ
ップが軽視されているのではないかと思うのですね。

多分それは、女の子の集団でも同じだと思いますね。男の子の集団だけだと、それが彼
らの日常の中で自然に役割分担みたいなものが、ざっくばらんな人間関係の中で適宜ある
のですね。それは教師と生徒の間でもできあがるし、生徒同士の間でもこのような関係が
できあがります。そういうことが基になって、男の子らしさ、女の子らしさのようなもの

が、やはり別学の学校で指導しやすいという特徴があると思いますね。それが将来大人になって、それを融合した大人らしさというものが、私は大切なのではないかと思います。

やはり今の日本で、大人で問題になっているのは大人らしさ、例えば責任感を持つとか、規則を守るとか、リーダーシップを取るとか、フォロワーシップを発揮しようとか、そういうようなものが問われないというか、欠けているのではないかという事実ですね。言葉を換えると個性化した時代になってきて、大人になって自分がやりたいことをやる人間は結構いますね、今の政治家を見ていてもそう思います。ところがやるべきことをやらない人間が増えている。水谷先生の話で、このままだと日本が滅びるということをおっしゃいましたけれど、実はそういうことなのではないか。やるべきことをやる人間、やる生徒であり教師であり、あるいは私学の経営者であったりするのではないかと思いますね。

ここに参加なさっている先生方は、一般の先生であったり校長であったりしますが、ひょっとしたら、今日ここで私どもが言っている、あるいは中井先生が本で書いていらっしゃることは、1から10まで解っているとおっしゃる方が大部分だと思います。

私立学校がこれからより発奮して男女別学が共学にならないで発展していくには、やはりこの良さをそれぞれ世間に訴えて理解してもらって、そして、私立学校ですから生徒がいなくなると経営できませんので、生徒を送ってもらう。そして大切なことは経営者も自分の学校の、建学の精神に基づいた教育を社会の変遷と共に、よく考えていただきたい。生徒募集に苦労しているからってそう簡単に共学と言わないで、特に東京の私学と言うのは、非常に歴史のある学校が大多数です。私も経営者の端くれにいましたので、少しだけ言いますが、東京の私立は参列の先生を始め協会の役員の方々が大変ご努力していただいて、助成金に恵まれています。ですので、ぜひそのあたりも、やりたいことではなくてやるべきことをこれから考えていくことがないと、私学の別学教育というのは支持されないのではないかと思います。

それともう一つ、今日ありがたいことに教科指導でいろいろお話があって、私もずいぶん勉強いたしました。男の子がよく言われるのは空間認知能力だと言われましたけれども、男の子は見えない力を想像し、それをあたかもあるような形で行動できる。これが男の特徴ではないかと思いますね。力学の話でもそうです。あるいは一昔前に地図が読めないうぬぬんという本がありましたよね、ああいう本に出てくるように、例えば北海道へ行ってない人間でも北海道の地図を見れば何となくイメージができる、大雪山がどうなっている、男の子はそれができる。たぶん女の子よりは優れているというのでしょうかね、統計的には。また、数学の世界の話ですが、ある研究会で文京区のB中学高等学校の中学1年生の図形の授業で、いきなり空間図形からやっています。いきなり直方体や立方体や三角錐や円柱が出てきます。三角形や四角形ではありませんよ、いきなりそういう物が出てきます。男子校です。そういうことも、私はその研究会に参加して大変画期的

なことだと思いましたが、やっぱりこれは男の子を教育しているのだと、皆が共通認識として持っているのだと思いましたが、このことを最後に付け加えておきます。以上です。

實吉先生

ありがとうございました。水谷先生のお話の中で公立の共学の話が出ました。私の知り合いのある方は「日本の戦後教育の中で男女別学じゃなくて共学校を公立の学校に取り入れていった、しかしこれはGHQの実験だったんじゃないの」という風に言われた。「東京以西の学校はほとんどが共学校になり、埼玉や千葉以北は共学校と別学校を公立の中に残していった、多分これは実験を彼らはしようとしたんじゃないの。ただ25年の朝鮮戦争があって、いわゆるGHQというかアメリカ自体が、日本の中でいろいろな事を研究することができなくなったからかなあ」という風に言われていました。それから都立の中高一貫校ができた時に、教育委員会あるいは教育長に「なぜ公立の中高一貫校が共学校なのか、男女別学はないのですか」という風に聞いたら、「お前ら東京都の教育政策に口を出すな」と脅されましたけれども、そんなことも含めて水谷先生、語り足りない所がおりだと思つるので、まあ公立というか先生のご経験だけではなくて、さっきお感じになっていることも含めて、我々に示唆をいただける話をいただければありがたいと思うのですけれど、よろしく願いいたします。

水谷先生

あまりこれ以上、公立の話はしたくないというのが私の思いでございますけれど、少し視点を変えた時に、新しい政権ができて8ヶ月でまた人が変わったというのは、さきほど松下先生がおっしゃっていた部分につながっているのではないかと、非常に残念な思いを持ちながら見ております。そのことはそれでやめさせていただいて、今は私学の仲間に入れていただいていますので、そういうところからお話をさせていただきたいと思つます。

私学の一番良いところは建学の精神があるということなのです。これは財産です、これは絶対になくしてはいけません。その上にそれぞれの学校の教育が成り立っている。4年間お世話になった今年105年目になる麹町学園で本当に私自身教えられるものがたくさんありました。女房に言われます、「あなたは女子校に行って良かったわね。」何故と聞いたら、「優しくなった」。人を切り刻むことが立場上どうしても強い面がありますので、そういう意味で人に配慮するというのを、私は子どもたちから教えられた。良妻賢母という言葉が校歌の中にあります、それを今も子どもたちが歌っています。だけどその当時と違った意味で子どもたちは理解しているだろうし、私たちもそう理解していかなければいけない。やはり一人の人間としてどうあるか、その中で男女あるわけですから、どうあったらいいのか、男子に寄り添う普通教育というのが麹町学園の主たるものでした。いわゆるお裁縫の学校とか、そういうものではなくて普通教育なのです。ですからお医者さんもたくさん

育って出ておりますし、文学者もいます。彼らを育てていった建学の精神は今でも生きています。それがあから、いわゆる募集活動の中でもその話をすると、受験生の保護者の方々は耳を傾けてくださいますし、その思いに対して賛同して下さる。4年間中学から三桁の受験生が入学し、それが3年間続きましたので、ここまでが私の仕事と思ってやめさせていただきました。たまたま海城から話があって、そのまま行って、海城の1年目、理事長に「1年黙って見ていてください」と言われました。それともう1つ言われたことは、「あなたにすべて、教育についてはお任せいたします」。それで「はい、わかりました。1つだけお願いがあります。お預かりした生徒が高校の教育に沿わない場合、外に出ていただくわけです。その時だけ報告させてください」。3年目になりますけれど、理事長はいっさい教育に対して口を挟みません。ですから体育祭があろうと文化祭があろうと理事長室から出ません。すべてお前に任せ、そう言われますと、やはりこちらもその積もりでやらなければなりませんので、そういう点では非常に生きがいを持ちながら老体に鞭を打っています。

「国家社会に有為な人材を育成する」というのが海城の建学の精神です。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、高校からの募集を23年度からやめました。それは6年一貫教育の中で国家社会に有為な人材を育てるべきであるというところ、教員と1年半やり合いました。それでやっと「うん」と言ってくれました。理事長は「3年遅いよな、校長さん」と応援してくれまして、精神的に支えになっていただきました。今ヒアリングを理事長と2人で、学年主任・教科主任・部長・委員長の方々としています。この1年間をどうするのか、そして最後にまたこの1年間どうだったのかということ年々2回ですけれど、経営計画も出しております。

そのヒアリングの中で、特に学年主任の方から、今回の中井先生のお話の部分が出てきているのです。中学1年・2年の学年主任から、生徒の状況について、書き取る力、話を聞いてノートに書き取る力が弱い。そして表現する力も弱い。そして説得する力、それもすごく弱い。この3つを中学の3年間で、私たちはやってまいりたい。いわゆる男の子の言語能力といったらよいのでしょうか、それは、やはり育てていかないと次の時代には追いつかないだろうということ、そういう意味で中井先生のお話を、またご本をいただきまして、うん、なるほど、ということで、我々が感じていることと実践することがこの中にかなり込められているという思いを強く持って、ああ良かったなと思っております。

中学1年生、2年生というのは思春期の入り口に立ったばかりだと思うんです。10年前だったらもう思春期に入っておりますけれど中学1年生、2年生のところではまだです。ですから、ものすごく意欲的なのですね。恥ずかし気がないんです。ですから何でもかんでも意欲的に手を挙げるし失敗すると頭をかいています。その中でどんと入っていったら。ですから中学1年生、2年生のこの2年間で、柔軟な、そして恥じらいのないところで、どれだけ物を入れていくか。入れていくという言い方は気にはなりますが、意欲的な

部分をどう育てていくか。中3ぐらいになると、恥じらいなり、何言ってんだよという顔が出てきますから、そこまでのところが正直言ってある意味で勝負ではないかと。そういうところで、高校からの募集をやめたひとつの理由はそこにあるのです。その中で我々が、十二分なものを共に学びながらしていくことができれば、次が出てくるだろう。ですから若い先生方は担任になっていただいて、そしてベテランの先生を補佐としてつけて、学年主任はその真ん中ぐらいで、そして必要な時は遠慮なく校長室へ飛び込んできてくれる人を置いています。そういうところで、かなり良い形で動いています。私のできることは子どもたちに入學式、始業式、終業式、また卒業式でお話をする、その中で教員にも語っていく、それしかありません。あとは朝、校門の所に立っておはようと迎えておりますけれど、そういうところから、やっぱり子どもたちの良いところを引っ張り出しながら、次の社会を担っていく子どもたちを育てていきたい。子どもたちの一人一人持っているもの、それを丸で表した時に、その丸の中に我々の持っている正方形を入れ込むのではなくて、彼らの丸の外に正方形を置くことができる、言い換えれば彼らの持っている良い物の上に加えていく、彼らを縛り込んでしまうのではなくてより伸ばしていくという発想が必要ではないか。特にこれからの、いわゆる競争社会と言われる中で生きていくためには $1 + 1 = 2$ ではない、3にも4にもなるような、そういう一人ひとりを育てていくことがいま問われているのかな、そういうところで海城では次に向けての準備をいろいろと始めているところです。以上です。

實吉先生

はい、ありがとうございました。ちょうど今話し合いを始めて1時間半が経ちました。実は私ども、いま教育に関わっていて、あるいは子どもたちに関わっていて、現状をどうするかという話が今日は多かったかと思えますけれども、私も生徒たちに接していて、ただ大学に行くという目先の話ではなくて、自分の学校から巣立っていった人たちが、今どういう生活をしてきているかなというのは我々にとって大きな関心の的だろうと思います。そういう意味では、各学校とも先ほど同窓生とのつながりというお話がありましたけれど、卒業生たちが学校に帰ってきて、水谷先生の話ではキャリアデザインというお話がありましたけれど、学校に帰ってきてこの学校に学んで、今ある自分がとても幸せですよというような話を具体的に、もし持っていらっしゃる先生がいたらお願いします。

質疑等

實吉先生

では、お手が上がらないのでもう1つ視点を変えて、ご指名をしてお話しをしていただきたいと思います。西川先生、先生の学校は「慈愛」と書いて「あい」と読み、「誠実」と書いて「まこと」と読み、「慈愛と誠実と創造」という言葉で外部発信されています。その

「創造」という部分で、先ほどのお言葉の中に表出という言葉が出ましたが、教育、エデュケーションの語源がラテン語の引き出すという意味だとうかがっておりますが、我々は引き出すという側でいえば、子どもたちには表出、表現させるということなのですが、女子がそういう特性を持っているという上での、さらに何かお話しを加えていただくことがあればお願いいたします。

西川先生

まず、先ほど手を挙げなかったのですが、男子校もそうだと思いますが、女子校の出身者は、大学に入ってからあるいは世間に出てから、結構共学校の女の子に比べて元気がよいと言われるのではないかと思います。これは、中高時代いろいろ企画したり運営したりという経験を積んできているので、粘り強く最後までやってみようという経験を持っているからだだと思います。大学の先生から「なかなか良いものを持っていますね」というお褒めの言葉をいただくこともあります。それは高校時代あるいは中学時代にそういう経験を積んできているからで、卒業生からは「なんで他の子たちは動かないんだろう」なんて素直な感想を聞くこともあります。また、例えば、理科系に進むと、深夜まで実験があったり、いろいろなことをしなければいけない時に、粘り強く最後まで結果が出るまで頑張るといふようなところがあると聞いています。

ところで「創造」ということにつきましては、ラテン語については前校長の清水がいつもお話していたと思いますが、鷗友学園では「表出する」ということはキーワードになっています。随分昔は単に受け身に聞いていた授業を、最近は、いろいろな人の話を自分なりのやり方で咀嚼して自分の中でまた再生産するといひましようか、次に一步を踏み出すために、自分はどう考えるんだろうとか、分からないところはないかなという気持ちを持ち続けることを意識化させます。そして、それを他とコミュニケーションしながら次につなげていくことが、これからの不安定な時代にはとても大切だという共通認識で、授業なども受け身に終わるのではなくて、例えば感想を書せるなどしています。しかし最近、感想を書くだけでは物足りないのではないか、いけないのではないかという話も出ていて、例えば、その結果を友達同士で意見交換しあったり、次にどうするかというところまで考え実践させていく必要があるのではないかという話に今年なっています。

それが、先ほど實吉先生から入試などの姿勢などにも表れているのではないかというお話をしていただいたのですが、確かに中学入試の段階でもそういうような姿勢を持った生徒、粘り強く自分の理解をしっかりと確にしながら自分の考えをまとめていけるような生徒が来てくれれば大変ありがたいなと思って、入試問題などにもそういう姿勢をできるだけ表せるようにと心がけています。

實吉先生

ありがとうございました。

伊奈先生は先ほど物理の教えた話がありましたが、私は伊奈先生のお話の中で興味深く伺った話が1つありまして、徒然草の授業をする時に女子と男子では導入の仕方が違う、あるいは捉え方が違うという話が非常に印象に残っているのですが、中身はどうだったかということをおぼえてしまっているのです、もう一度そのあたりのご示唆をいただくとありがたいなと思います。

伊奈先生

教科指導で男子・女子は徹底的に違いますよという話をいろいろな場面で、特に説明会等で「だから別学なんですよ」というお話をしています。そういう中の事例として古文・古典の男子・女子の授業展開をあげますと、一般的な言い方をしますと、男子の場合は演繹的授業展開、女子の場合には機能的授業展開をとります。機能的授業展開は、非常に細かいことを積み上げて全体を理解していく形です。それを全体から入ろうとするとなかなか抵抗がある。

具体的にどういうことかといいますと、例えば新しい単元に入って、男子のクラスだととりあえず音読させる、声に出して読ませる。細かいことは気にせず、とりあえず読めるかどうかも含めてそういう授業展開をする。それから、ぼんやりと全体像が浮かんだ後、細かい単語を調べ、文法を調べ、時代背景を調べて全体を理解していくということが効果的だという教科です。

女子は、もちろん個性にもよりますが、訳も分からず全体を読み通すということに抵抗がある。このことを説明会で話しますと、お母さん方にすごくうなずいていただけるのですが、男子の方法では抵抗がある。ですから最初に、単語を調べ、文法を調べ、時代背景を調べて最後に通読をする。こういう授業展開というのは、英語についてもそうだという話を聞きましたし、理科についても実は同じような展開があります。女子生徒については、ある種分からない状態を持続するということが、なかなか抵抗があります。1つひとつ納得して積み上げていくということが学ぶ姿勢の中で重要な点があるのだなということですね。

男子の場合は多少分からなくてもそのまま進めていって、後で全体が理解できるということが可能ですが、そういう意味での授業展開というのは明らかに違って来るなと実感しています。

私どもは学校の構成が男女別学という構成です、なぜ共学にしないんだというようなお話をいただくと、こちらから、なぜ別学にしているのかという話をこういう形でさせていただきます。今までこういったお話をする時に、1つのある種の後ろめたさがありました。男子・女子の教育は違うんですよ、この違いを大勢の前で言うことに対するある種の抵抗感というのがあったことは事実です。それが今回のような形で、全体の中で改

めて女子教育、男子教育、なぜ女子校なのか、なぜ男子校なのかというところを踏まえた上で、この違いを情報交換できる、分析されるというのは、私どもにとっても嬉しいことですし、このシンポジウムが今後の教育全般についても、一つの指針となると思います。私どもは、男子・女子の授業の違い、データの分析、それからアンケート調査も毎年やっておりますけれども、その意識調査も随分男子・女子で違います。学年による変化も出てまいります。そういう意味では今後もう少し深めていきたい。それがやはり男子校の在り方、女子校の在り方にもつながっていくのかなと感じております。

實吉先生

ありがとうございました。今日は保護者の方、あるいは新聞記者の方、それから塾関係者、当然学校関係者の方もこの中に大勢おられます。会場から、今日この5人の先生方にお話しいただいたことの中で、もう少しこのところは聞きたいなということを手短かに質問していただきたいと思います。挙手をお願いしたいと思います。たぶん大勢の方がお手を挙げるのだろうというように思っています。

吉本氏

佼成学園女子の広報のライターをしております吉本と申します。

私も関西の中高6年間男子校におりますのでまた人生をやり直せるのなら是非とも男女別学でと考えている者です。私は生徒募集を担当しておりますが、生徒の保護者からもしこんな質問があったらという観点で、先生方に少しお答えいただきたいと思うのですが、2つございます。

1つ目。男女別学、3年であったり6年であったり、あるいはそれ以上であったり、これってそれぞれ効果が違うのですか。つまり、高校だけ男子校、高校だけ女子校、あるいは中高女子高、あるいはもっと小学校からなどと、やはり別学期間の長さによって教育効果というのは違ってくるのでしょうか、という質問があった場合。

もう1つ。我々の学校もそうなのですが、卒業後の有名大学への合格率などは当然保護者にPRしやすいですので「男女別学ですと3年ないし6年後に、この様な進路に皆さん進まれます」と言うとお安心される保護者の方がほとんどなのですが、これも価値観の問題で、いい学校に行って、いいお仕事に就いて、いいお給料をもらうという幸せの価値観もでございます。もう1つ、その後、男女パートナーを組んでお仕事をしたり、あるいは家庭を作ったり、そういったところの幸せを子どもに求めるという価値観もあると思うのですね。こういう男女がやがてはパートナーを組む、ということに対する男女別学のメリットって何ですか、というように保護者に聞かれたらどのようにお答えいただくのかなと、この2点をお願いいたします。

實吉先生

どうですか。お答えいただける先生はいらっしゃいますか。経験的には伊奈先生の方からかな。いかがでしょう。

伊奈先生

私どもは高校からも生徒を募集しておりますので、今のご質問で高校から入ってくる生徒と、それから中学校からの6年間の教育でもって効果は違うか。その別学の効果という意味での違いが明確に出ているかということが第一点ですね。

それについては、入学の生徒集団という形で中入生と高入生の集団が違いますので、一概には言えないと思いますが、私どもが思っているのはやはり6年間で圧倒的にその違いが出てくる点です。先ほどありましたように男子の生徒については、中学校の3年間と高校の3年間というのは明らかに違いますよね、大きく変わってくる。その変わってくる前でお預かりするということが非常に大事だろうなと思います。中学校の中での過ごし方というのが、特に男子生徒においては大きく変わってくるのではないかなということを実感しています。女子生徒についても、高校から入ってくる生徒は入試を経て入ってきますので、入試の及ばず影響を考えると一概に比較は出来にくいですが、大きな変化、飛躍的な変化という意味ではやはり圧倒的に6年間の効果は大きいという実感を持っています。

それから、パートナーを作る上でのメリットはどうか。よくそれは男子・女子別学では、なかなか付き合いが出来なくなってしまうのではないかというご心配をいただいております。そういう点でうちは「クラブ活動は一緒ですよ」という言い方をしています。ただほとんどの生徒は、特に運動部等をやっている生徒についてはもう6年間男子・女子という形に分かれていきます。中高6年間の間でのやはりその異性を気にしない物事に対する集中といいますか、その効果の方がずっと大きいのではないかなと思います。中高6年間、男子校にいたから、女子校にいたから、大学以降付き合いが出来ないということとはあり得ないだろう、そう保護者にはお答えをしています。私自身そういう実感を持っています。

實吉先生

今の期間の話、それからパートナーがどうだっていうのは、実は中井先生の本を読んでいただくとすっきりすると思いますよ。この中に明確に書かれていますから、是非お買い上げいただいて読まれていただくのが一番いいかなと思います。

次、どなたか。随分シャイな方が多いですね。みんな共学生育ちですか。

池田氏

お世話になります。エデュケーショナルネットワークの池田でございます。

先ほど水谷先生のお話の中で、昭和 50 年代頃は生徒会長も副会長も男子、その後、副会長が女子になって、実質的に切り盛りするようになって、今は会長も堂々と女子になってというようなお話がございました。男子の方が弱くなったのかなというような印象もあるかと思うのですが、どうしてそんな風になってしまったのか。水谷先生だけでなく他の先生方も含めて、男子のその変質というように考えた方がいいのかどうか、その原因について何か先生方で思い当たることがあれば、お教えいただければと思います。よろしくお願いいたします。

實吉先生

何をもって肉食というのか、何をもって草食というのか分かりませんが、草食系の男子、肉食系の女子という言い方をされています。その辺も含めて、水谷先生、今のご質問にお答えいただければと思います。

水谷先生

1 つは、時代の変化というのがその中にある気がします。こんな言い方をすると女性に失礼になるかもしれないけれど、今までの、特に昭和 40 年代ぐらいまでは、いわゆる女子は虐げられて育ってきている部分が多分にあると思うのです。家庭にあっても母親と一緒にいることが多いとなると、やっぱりそこでマイナス同士がパチパチとぶつかるわけです。社会においてそういう傾向があった時に、徐々に共同参画ではございませんが、女性がはっきりものを言うことができる、そういう社会自身が変化する中で変わってきている部分があると考えています。

それともう 1 つは、男子については溺愛されすぎているのではないだろうか。骨抜きですよ。今の中学生を見ていると。そこに 1 つ喝を入れたいなという思いも個人的には持っているのですが、やはり何かあると出てくるのはお母さんなのです。お父さんも最近出てくるのです。蹴っ飛ばしたくなりますけれども。そういう状況がある中で、子どもが自分の考えっていうのでしょうか、それが出せない状況がある。それは、本当は出さなくてはいけないのですが、出さない方が楽だからというので納まっている部分が特に男子の中には強く出てきている。これは変えていかなければいけない。そういうことが私は大きく影響しているのかなと思います。

それともう 1 つは、社会そのものが何もなくても済むようになってきていると思うのです。ボタンを押せば美味しいものが出てくる時代ですし、鉛筆を削ることも出来ないし、それこそ包丁だって使えない。本校の場合は包丁を使う家庭科の授業の時、40 人の生徒に教員を 2 人つけます。切れませんから。お裁縫の時は 1 人つけますが、それだけの配慮をしていかなければならない状況が出てきているところが 1 つあるのかな。完全にきちんと分析しているわけではありませんが、そんな思いを持っています。

實吉先生

ありがとうございました。子どもが少子化の中でペット化しているというのはよく聞く話かなと思います。先生方ご承知かと思いますが、研究所主催の教頭部会研修会があるのですが、今年の研修会で、三沢先生を講師に迎えました。三沢先生は子どもたちに絵を描かせているのです。早稲田のAO入試問題に出たことがありますから、ご覧になった先生がいるかもしれませんが、小学校6年生に木と人と家と、この3つの要素でA4の紙に絵を描きなさいという指示をし、それを時系列で集め研究されています。同じ小学校6年生なのですが、1981年と1997年の時とで、描かした絵がびっくりするほど違ってきます。1997年の絵は、まさに小学校1、2年生が描いているような絵ではないかと思うほどです。こんなことを見ても、先ほど社会的な背景とか時代の流れという話があったと思いますが、今の時代を生きている子どもたちの在りようというのがだいぶ変化しているのかな。このあたりは、私ども教育関係者としてはかなり突っ込んで勉強した上で子どもに接していかないと、これから先、やばいことになるかなと思います。今モンスターペアレントということが問題になっていますが、そのモンスターペアレントを育てたのも私たちですから、そこを嘆かないでいかなければならないかなというように思います。

五反田氏

エデュケーショナルネットワークの五反田と申します。先生方、本日はどうもありがとうございました。大変勉強になりました。

先ほど西村先生から、併設の幼稚園で男女の集中力の違いといったお話、大変興味深く伺いました。ということで、男女別学というのはいつぐらいの時期から適切だと思われるかといったことをお話しいただければと思ひまして、是非ともよろしく願い申し上げます。

實吉先生

西村先生、お願いします。

西村先生

私は指導するという点については、中高の6年間の経験しかありませんが、この時の別学にこそ価値がある、というように思うところでございます。先ほど卒業生がどんな状況で学校に戻ってくるかというご質問の時に、私も共学校出身なものですからちょっと気が引けて手を挙げそびれたのですが、この時代に、本音で付き合う友達に支えられた経験があるから生徒は学校に訪ねてくるわけですね。今日も私がここに来る前にも卒業生が2人が友達同士で訪ねてきていて、すれ違いました。これからクラブに行つて先生たちにも顔を見せてとか何とか言いながら別れましたが、その子たちの付き合いは、もし共学であ

ったら本音でここまで付き合い、支え合いという経験がなかったでしょうから、何をするにも理解し合い、母校を訪ねようという時にも誘い合うとか、情報交換をしあうとか、そういうことはおそらくなかったらうなあとと思います。

小学校6年間でも、男女の違いを意識していたようで、中学に入学した生徒などに「小学校の時、男子どうだった？」と聞くと「子どもよ」と、どんなに体が小さい女の子でもそう言うわけですね。そんな違いを小学時代に経験し、心身の成長変化の著しいこの中高の6年間に男女別でそれぞれに焦点を当てた教育がなされるということが重要なんだろうと思っています。

中高の6年間だからこそその別学の意味があると思っておりますので、これは答えにならないのですが、どの段階から始めたらいいのかは経験がないので分かりません。

實吉先生

先ほどの長さの話、要するに小学校なのか、中学校なのか、高校なのかということと、今のご質問も含めて、たぶん中井先生が一番この本の中で書かれていることで思いがあまりになると思うので、少しお話しいただけますか。

中井先生

すいません。また出てまいりました。確かに中高男女別学で教育した方が、非常に効果が高いと思います。いま西村先生が、経験がないのでと控えめにおっしゃいました。私は経験があるので、ちょっと申し上げたいと思うのですが、私の学校は男子校で、全国に2万2千校小学校があるのですが、そのうち男子校は日本に3つだけなのです。3つだけのうちの1校です。女子校は25校小学校があるのですが、そのうちの1つなのです。パーセンテージにすると、全国で0.12%、1%にも満たないです。ですから、なかなか理解していただけないのですが、確かに男子と女子と、もう小学校1年生の段階で全然違うのです、本当に。教師だったらすぐに分かります。授業を1時間するだけで全然違うのが分かるのですね。方法も違ってきますし、私たちの教材研究も全く違ってきます。

ですから私たちは、別学は小学校1年生からした方が非常に効果的だということを20何年間ほどの経験ですけれどもそう思います。東京には100年以上の経験のある男女別学校、小学校からされている学校はありまして、本当に名門で伝統のある学校なのです。そういう学校も訪問しまして話を聞いたのですが、やはりなかなか理解していただけないけれど、確かに小学校低学年から分けた方が効果があるということを申し上げたいと思います。どうも失礼いたしました。

實吉先生

ありがとうございました。

では、今日のお話し全体に言えることですが、共学校を否定した話ではないということは共通に理解してください。男女別学であることの意義をもう一度考え直そう、共学校の先生には是非この会に来て頂いて「ああ、そういうこともあるよな」と共学校から見て今日の話もして頂けると更に盛り上がった話になったのかと思います。今日は忙しい中、忙しいというのはいけませんね、心を亡くしますから、校務ご繁用の中この会に馳せ参じていただき、特に水谷先生は本来ならロシアに出張されるご予定だったのですが、「こういうことをやりたいので先生どうしても出て下さい」ということでお願いして、敢えて今日お出ましいただきました。改めて水谷先生、松下先生、西川先生、西村先生、伊奈先生にお礼の拍手をいただけるとありがたいと思います。

本当に不束なコーディネーターで先生方には不快な念を与えたかも知れませんが、この時間までお付き合いを頂きましてどうもありがとうございました。夏休みまだ暑さが続きます、9月から各学校でそれぞれご活躍いただくことを祈念いたしまして、今回のシンポジウム閉じたいと思います、よろしくお願いいたします。それでは、辰巳先生にバトンタッチいたします。

辰巳先生

それでは清水先生、閉会の言葉をよろしくお願い致します。

清水哲雄先生

皆様お疲れ様でした、お陰様で無事に終了することが出来ました。大変熱心にお聞きいただきまして本当にありがとうございました、閉会の辞と致しますけれども、毎年行っております鷗友学園の教員の研修会、この夏の二日間に渡る研修会のテーマは「これでいいのか、鷗友学園の教育」というのだそうです。私はもう抜けさせていただきましたので、その議論には関わることは出来ないのですが、凄くいいテーマだなと思っています。今回この男女教育別学シンポジウムは「これでいいのか、日本の教育」ということだと思っております。これを解決するためには歴史に学ぶこと、先ずこれが大変大きいと思います。先々週、私は岡山に行き緒方洪庵の生家を訪ねました。そこでまた思いを新たにしましたが、緒方洪庵は15歳で家出をして大阪で勉強をいたします。そして通称適塾を創り、学びたい者は皆来いと全国に呼びかけて、沢山の門人がそこに入ります。その中の一人が福沢諭吉でございます。緒方洪庵に言わせると「あんなに勉強した人はいなかった」と福沢諭吉のことを言っていたそうですが、その福沢諭吉は適塾の塾を貰って慶応義塾を創ります。こうして近代日本の私学の系譜は創られていくのです。その流れの中で「私ならこういう教育をする」「現状を打破するのだ」という思いで創立者が私立学校を建てて参ります。もしかしたら今、そういう時代になっているのではないかと、21世紀に入り10年過ぎまして、今一度私学の在り様というのを突きつけられているのではないかと思います。従って

私達は歴史に学ばなければならないと思うと同時に世界に学ばなければなりません。先程、中井先生の方でいくつかの国の取り組みが紹介されました。1996年にはユネスコから21世紀の教育は4つの柱からなるべきだとの発信が全世界に向けてなされました。それを受けてフィンランドでも、ドイツでも教育改革が大々的に行われているわけです。その結果例えば皆さんご存じのPISAにしてもフィンランドは常に上位を占めている。このように国をあげて教育の大事さを実践しているという現状がございます。従って私達は世界に学ばなければならないと思います。

それからもう一つは教育界のことを教育界だけで片付けてはならないと思うのです、さまざまな関係する分野の方々、政治を含めて多くの人たちを巻き込みながら、新しい、より良い教育を目指さなければならないと思います。この男女別学シンポジウムでただ単に男女別学がいいと言うだけではエネルギーになりえない、多くのものを巻き込みながら、より良い教育を目指して、開会式の時に申しあげましたように未来を担う子ども達に創造的に社会で活躍してもらう力を付けるのだという強い思いを皆さんで共有して、良い教育を作り上げていきたい、そんな思いを持っております。

今回は第一回目ということでございました、第二回目のことは全く考えておりませんが、私達は連続的にこの取り組みを続けていって、発信していきたいと思っておりますので、今後とも是非エネルギーをいただきたい、そして皆で1+1が3にも4にもなるように活動していきたいと思っておりますので、今後ともどうぞお力添えをいただきたいと思いき、本日は長いこと本当にありがとうございました。以上で閉会といたします。

第1回 男女別学教育シンポジウム

テーマ 男女別学が日本を拓く

私たちは男女の違いを尊重した教育こそが、より良い成果を生む教育であり、子どもたちのために現在も未来にも必要だと考えています。

そこで、広く日本の方々に向けて男女別学の良さをお伝えするために、下記のような会を催すことにしました。

この会は、全国のすべての親や子どもに向け「男女別学教育こそが、日本の明るい未来を拓く教育である」というメッセージを発信する日本で初めてのシンポジウムです。

皆様、どうぞ奮ってご参加ください。

記

日時

2010年8月10日(火) 午後1時開場 1時30分開会 4時30分閉会

会場

アルカディア市ヶ谷(私学会館) 6F「阿蘇」の間 (東京都千代田区九段北4丁目2番25号)

プログラム

1時30分 開会のご挨拶

清水哲雄(鷗友学園女子中学高等学校前校長)

1時35分 基調講演 「なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか」

中井俊己(日本男女別学教育委員会代表)

2時25分 シンポジウム

伊奈 博(桐光学園中学校高等学校校長)

西村弘子(田園調布学園中等部・高等部校長)

西川邦子(鷗友学園女子中学高等学校校長)

松下秀房(京華中学高等学校前校長)

水谷 弘(海城中学校高等学校校長)

コーディネーター 實吉幹夫(東京女子学園中学校高等学校校長)

質疑応答

4時15分 閉会のご挨拶

清水哲雄

参加者

学校関係者・塾関係者・マスコミ関係・研究者・一般の方(160名まで)

協賛 (五十音順 8月11日現在)

跡見学園中学校・高等学校 アドバンスインターナショナル、エデュケーショナルネットワーク、鷗友学園女子中学高等学校、鷗友教育研究所、神奈川学園中学校・高等学校、蒲田女子高等学校、北豊島中学校・高等学校、国本女子中学校・高等学校、京華中学校・高等学校、京華女子中学校・高等学校、共立女子中学校・高等学校、佼成学園女子中学校・高等学校、麹町学園女子中学校・高等学校、香蘭女学校中等科・高等科、芝浦工業大学中学高等学校、下北沢成徳高校、品川女子学院中等部・高等部、聖学院中学校・高等学校、精道三川台小学校・中学校・高等学校、高輪中学校・高等学校、田園調布学園中等部・高等部、戸板中学校・女子高等学校、東京家政学院中学校・高等学校、東京女子学院中学・高等学校、東京女子学園中学校・高等学校、桐光学園中学校・高等学校、藤嶺学園藤沢中学校・高等学校、トキワ松学園中学校・高等学校、獨協中学校・高等学校、中村中学校・高等学校、長崎精道小学校・中学校、新渡戸文化中学校・高等学校、富士見中学校・高等学校、富士見丘中学校・高等学校、藤村女子中学校・高等学校、保善高等学校、本郷中学校・高等学校、三輪田学園中学校・高等学校、八雲学園中学校・高等学校、横浜富士見丘学園中等教育学校、立正中学校・高等学校

.....

以上、第1回男女別学教育シンポジウムは、北は北海道、南は長崎まで予想を超える多数の方にご参加いただき、おかげさまで、好評のうちに終えることができました。

関係者の皆様、協賛団体、参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

代表 中井俊巳